



V O L . 23 No. 4 The University of the Ryukyus Library Bulletin. 1991. 1 . 21

仲宗根政善氏沖縄言語研究資料について

上 村 幸 雄

第2次大戦後の琉球方言学の復興と繁栄の功績のおおくが、この大学が創設されて以来、定年退職までながく国語学を講ぜられ、副学長もつとめられた仲宗根政善名誉教授に帰せられるものである。沖縄戦のさなか、ひめゆり部隊の引率者として生徒に命のとうとさ、平和のたいせつさをおしえた教育者として、そして平和主義者として名だかい仲宗根政善は、方言学者としても、みずからふるさと今帰仁村与那嶺の方言をはじめとする琉球列島の数おおくの方言を研究、記録し、その間、おおくのわか手の方言研究者を育成した。仲宗根が1932年に東京大学の文学部国語国文学科を卒業したとき、研究者として東京に職をえることができず、故郷にかえらなければならなかったという事情、そして、沖縄戦で戦場を生徒とともにさまよいながら、九死に一生をえたということは、戦後の、そしていまの沖縄にとってみれば、なんと幸運な、また意義ぶかいことであっただろう。仲宗根はわかいとき、名護にあった県立3中の教諭の時代にみずからあつめて、大戦中もたいせつにもちあつめた列島方言の貴重な調査資料をいったん戦場ですべてうしなってしまう。したがって、今回、琉球大学図書館が蔵することになった資料（以下、仲宗根資料と略称）はすべて戦

目 次

仲宗根政善氏沖縄言語研究資料について	1	沖縄関係資料新着案内	10
国連寄託図書館について	4	アーキビストの養成	12
学術情報システムと大学図書館		図書館事情	13
(1) 目録・所在情報サービス	5	医学部分館だより	14
書籍紹介 金田一春彦著「日本語」新版	7	電子メールのデモについて	14
< 係の横顔 > 参考調査係	8	トピックス	15

後のもの、しかもほとんどが戦後の沖縄にはじめてつくられた高等教育機関、琉球大学で、ようやく学問らしい学問がめばえはじめた時代、だいたい1950年代なかば以降のものである。ご自身が視力の減退などによって、もはやこの大量の資料を駆使した研究が困難になられたため、戦後の琉球方言学のあゆみを代表しているともいえるその資料の貴重さをしる弟子たちが心配して、先生とご家族との同意をえて、資料のリストアップ作業をへて、今後の琉球方言学の研究にできるだけ役だてるため、これを琉球大学図書館の所管にうつすことが同意されたのであった。

この資料は原稿用紙などにかかれて製本されたもの、バインダーでとじられたもの、大学ノート、記入された各種の言語調査票、そしてこれら資料の中に印刷物からきりとられてはりこまれているもの、あるいは単にはさみこまれているもの、さらには、研究上の情報の詳細なかきこみのおこなわれた書物など、形態はさまざまである。これらを、仲宗根の琉球大学の弟子で、おなじ今帰仁出身の方言研究者、島袋幸子が一次的な整理とリストアップ作業をおこなった。その結果によれば、その量はいまのところ全体でおよそ6万7千ページあまりに達していて、なお未整理のものが若干発見されつつあるので、総量はこれより若干増加するはずである。

今帰仁村字与那嶺という、私など本土出身にとってはふしぎなひびきをもっていた地名は、日本の方言学史上、仲宗根のその畏友の言語学者で仲宗根を相手にこの方言の音韻とアクセントとをはじめて研究した服部四郎東京大学名誉教授によって、第2次大戦まえから研究者の間では知られていたが、仲宗根資料の約3分の1はのちにかれの代表的な著作となった『沖縄今帰仁方言辞典』（1983、角川書店）の完成にいたるまでの、長期間におよび、何度もかきかえ作業のおこなわれた各段階の原稿を主とする今帰仁方言研究資料である。そしてその中には、今帰仁方言の助詞の研究などのように、ほぼ完成しながら、まだ刊行にいたっていないおおくの原稿もふくまれている。

さらにまた、この上ない貴重な研究資料として、かれが戦後方言研究を再開してからの琉球列島諸方言についてのおおくの地点での臨地調査の記録がふくまれている。沖縄が本土に復帰する以前も仲宗根はけっして本土の言語研究、方言研究と無関係に自分の研究を展開していたわけではなかった。かれが指導した琉球大学学生の琉球方言研究クラブも仲宗根が琉球大学に招聘教授としてまねいた服部四郎の講義が契機となって発足したのだが、この服部のつくった基礎語彙調査票は服部らのアイヌ語方言辞典、長田須磨らの奄美方言分類辞典など、さまざまな研究に際して役立てられたが、仲宗根もこれをつかっていくつもの方言を調査した。

また、仲宗根は1958年から62年まで、国立国語研究所の地方研究員として『日本方言地図』のための調査に参加する。国立国語研究所は各県にひとりずつ、その県を代表する方言学者に委嘱して日本全土の組織的な方言研究を推進してきた。そのころ、私は国立国語研究所にあって島袋盛敏が最初の稿本をかいた『沖縄語辞典』（1963、大蔵省印刷局）の編集を担当する一方、『日本言語地図』の仕事にも参画していた関係から、この間の事情をよくしる者であるが、日本語研究に力める琉球方言学のもつ重要性から、国立国語研究所はこの調査の開始後3年おくらせて復帰前の沖縄もこれにくわえ、調査を仲宗根に委嘱したのだった。このとき仲宗根は5年間で国立国語研究所が要求した45箇所の方言のほかにも、みずからの意志によっていくつもの地点を調査している。

仲宗根の調査結果は『日本言語地図』（全6巻、1966～74、大蔵省印刷局）に反映されてはいるが、

そこからは仲宗根が記録した精密な音声の表記をすることはできない。この当時はまだ日本全国の方言学者に精密な音声学の表記による報告を要求できるほど、日本の方言学の水準は全体としてはたかくなかったので、統一的な整理と作図をする必要からそうならぬもいたしかたないのである。そして、戦前の仲宗根の前半生の研究による資料が、かれが戦前にその成果をまとめたわずか3編の論文（仲宗根『琉球方言の研究』1987、新星社に再録）に発表したわずかな部分をのぞいてはうしなわれてしまった以上、この時期、すなわち仲宗根の後半生の琉球方言の記録は沖縄にとってはまったくかけがえのないものである。戦前に琉球方言学上おおきなごとをした人々は伊波普猷（那覇出身）にせよ、宮良当壮（石垣出身）にせよ、金城朝永（那覇出身）にせよ、東京にいて研究活動をおこなった。東京にいてさえも、これらの戦前の沖縄がうんだ日本のほこりうる琉球方言学の先駆者たちは、めぐまれた研究条件にあるなどとは到底いえない不遇な環境にそれぞれあった。ましてや沖縄においては研究者として生きていく条件などなかった。したがって仲宗根はこの分野で沖縄にいて長期的に広範な方言学的研究をおこないえた最初の人なのである。そしてその記録は現在までに存在する琉球列島諸方言の記録資料の中で、きわめて質のたかい精密なものである。なぜなら、かれは有気音と喉頭化無気音との音韻対立のある中央山原方言地域を出身地とするはじめての方言学者であり、かつとくに音韻とアクセントに関してはきわめて正確な記録者であったから。それゆえ、かれの戦後のこのはやい時期における記録は大変に貴重なものである。そしてこの時期の仲宗根によってはじめて記録された地点がすくなくない。過去にいくどとなく琉球方言の緊急の研究、記録の重要性をとき、1980年代にはいつてから仲宗根のあとをつぎ、仲宗根を代表にあおいだ沖縄言語研究センターという組織のもとに琉球方言研究を大規模に展開してきた筆者らにしてみれば、仲宗根がのちの研究者がこれを利用することを期待しつつ、この骨のおれる仕事をおこなってきたことを以前から知る者として、これらの資料をあらためて目にするとき、ふかい感慨をよびおこさないではいられないのである。東京で著作と編集がおこなわれた、というよりも当時は東京でしかおこなわれえなかった『沖縄語辞典』も、仲宗根の『沖縄今帰仁方言辞典』にいたる研究におおきな影響をおよぼしたことは、今回の資料にふくまれている『沖縄語辞典』の余白への仲宗根の価値ある大量のかきこみがこれを証明している。

仲宗根資料にはこのほかにも、かれが長年にわたって、自身で、そして自宅でおおくの後輩や弟子をさそって「おもしろ研究会」としてつづけてきたおもしろの研究に関するものその他がふくまれ、それらは、整理がすすみ、利用しやすい形にととのえられるならば、今後おおくの方言研究者にさまざまな形で役にたつだろう。

さらに仲宗根資料には、卓抜した教育者としてのかれが戦後沖縄の国語教育の復興につくしていた文教学校時代の教育関係の記録、また、かれが副学長をつとめた初期の琉球大学における自身の講演の原稿などをふくめ、教育に関するおりおりの所感、意見などをふくんだ記録などもふくまれている。これらは戦後沖縄の教育史や琉球大学の歴史にとっても興味おかい資料であろう。

教養部の仲程昌徳教授をはじめ何人かのかたがたの尽力、そして『沖縄今帰仁方言辞典』の編集にもたずさわった先述の鳥袋の骨おりによって、仲宗根のこれらの資料は整理されつつある。しかし資料の形態が多様であるため、仕事はそれほど簡単ではない。たとえば1冊の調査票にペンと鉛

筆と赤鉛筆とで、同時に3地点の方言資料が国際音声記号とアクセント符号によって記入されていたりして、マイクロ化、コピーなど、比較的安価に、かつ迅速になしうる整理の方法にたよれない部分が多くない。整理は当然専門的な知識をもつ人のすくなからぬ時間を必要とする。そして関係者は、資料のいたずらな死蔵や損壊がおこらないよう、そしてできるだけはやい時期に学内、学外の研究者に公開されておおくの研究者に利用できるよう、その方策を検討中である。

(うえむら ゆきお：法文学部教授 言語学)



国連寄託図書館について

すでに御承知の方も多いかと思いますが、当図書館は1986(昭和61)年に国連寄託図書館になっています。その目的は、研究者はもとより広く一般国民に対して、国連が行っている活動をより正確に理解してもらうことにあります。

現在、寄託図書館は全国に12カ所(うち国立大学は琉大を含めて5カ所)ありますが、まだ充分に活用されていないことが、つい先頃、中央大学経済研究所で開かれた第22回国連寄託図書館会議(平成2年11月15~16日)でも指摘されました。とくに、国連資料を専任とした職員のいない、他の業務とのかけもちを行っている国立大学図書館にその傾向がいちじるしいようです。

さて、会議のなかでは「経済摩擦とGATTの役割」という講演もありましたし、また、この夏以来世界の耳目を集めているイラクによるクウェート侵攻に関する国連の対応が、もっぱらフェレンス事例として多くなっているとの報告もありました。たとえば、東京にある国連広報センターによりますと、国連軍と国連平和維持軍、それに多国籍軍のちがいを、国会での答弁からマスコミに至るまで、その理解がきちんと把握されていなかったということです。

国連資料といってもずいぶんと多岐にわたっているうえに、膨大な量にのぼるだけに、おそらく現物を見てもすぐにはその内容・利用方法がわかりにくいだらうと思います。日本語版資料の要望が多いのもそのあらわれでしょう。が、やはり具体的な調査目的をもって、実際に資料を手にしてみることを以外に、効率的で生産的な利用は望むべくもありません。

以下に主な国連資料を紹介します。なお、国連資料は3階雑誌閲覧室の国際資料コーナーに備えてあります。

(1) Yearbook of the United Nations. (年刊)

政治・経済等幅広い国連活動を概観するのに、もっとも簡便なものです。

(2) UNDOC: Current index. (月刊)

この目録はダグ・ハマースホルド図書館(Dag Hammarskjold Library)が受け入れた国連発行の文書、公式記録などを載せています。

学術情報システムと大学図書館 (1) 目録・所在情報サービス

松 浦 正

図書館では、1人でも多くの大学の関係者に学術情報システムを深く理解して貰うことと、平成3年1月には本学をノード校にして学術情報ネットワークが沖縄県まで敷設され、回線が開通する運びになったことを考え合わせ、平成元年11月と平成2年9月に全学的な行事として学術情報センターの関係者を招き学術情報システムに関する講演会を開催した。

この学術情報システムについては、昭和53年11月の文部大臣から学術審議会に対し「今後における学術情報システムの在り方」を諮問し、昭和55年1月の同審議会が取りまとめた答申に基づき整備が進められたものである。その後も学術審議会学術情報資料分科会学術情報部会において時代の趨勢と新たな学術研究の展開、さらに情報通信・情報処理技術の進展をにらみ国際化への対応も行いつつ拡大方策が検討され今日に至っている。

ところで、標題である学術情報システムと大学図書館の関係を振り返ってみると、大学図書館は学術情報システムの整備とともに真の意味で業務の機械化が行われるようになったと言っても過言ではない。その一つは目録業務であって、目録業務は図書館の基幹業務の一つであり、その機械化は図書館の長年の夢であり懸案であった。情報の増加に対し書誌・所在情報提供の慢性的な遅延という悪循環を繰り返し、業務合理化の大きな障害になっていた。この目録・所在情報サービスの運用でこれらの障害も除去されたと同時に共同目録作業が確立された。多くの大学図書館が参加し、日常業務の延長上で全国規模の学術図書館の総合目録が形成される意義は大きい。NACSIS-CATを利用することにより他大学等に所蔵する図書館の所在情報も迅速かつ容易に検索が可能になり、図書館の借用に要する日数も短縮されている。さらに学術情報センターではこの総合目録をベースにしてILL (Inter Library Loan: 図書館間相互貸借) システムの開発に着手しており実現に向けて研究がなされている。これらの一連の整備は学術情報資源の共有という学術情報システムの理念が達成されつつあると言える。

平成2年5月1日現在学術情報センターに接続し同センターの提供する目録・所在情報サービスを利用して目録業務の機械化を実施している図書館は国立83、公立3、私立38大学にのぼっており、データベースに収納されている件数も、和図書: 書誌381,937件、所蔵1,763,613件、洋図書: 書誌434,183件、所蔵1,558,630件に達している。これからも学術情報ネットワークの整備・拡充により最寄りのノード校を経由して学術情報センターに接続が可能になったことから、今後も多くの図書館の参加が見込まれるといわれている。県内大学図書館も学術情報ネットワークの沖縄県までの拡張の機会に目録・所在情報サービスを活用するための早期の接続が望まれるところである。

本学も、いち早く情報処理センターの支援を受け学術情報センターに接続し目録業務の機械化を実施し、本学が受け入れた図書を学術情報センターの総合目録データベースに登録しており、他大学等からの現物貸出しの依頼に応えられるよう体制を整えている。一方で、平成2年6月には懸案であった本学のオンライン目録検索サービス: OPAC (On-line Public Access Catalogue) の運

用を開始し、本学の目録システムも一応の整備を終えたところである。利用する側にとっても、著者名あるいは主題に関わるキーワードを入力するだけで迅速かつ網羅的な検索が可能になったことで、コンピュータ世代が多くを占める大学図書館では、従来のカード目録に代わって効率的な検索手段として定着したものと確信している。

今後の課題は、このデータベースの正確な維持管理と有用な学術図書の遡及入力、初期に作成したデータの修正等がある。また、システム全般についても利用者の意見を参考にして、より使いやすいシステムとするよう順次改善に努める。

また、これらの目録システムを利用者に理解してもらうため、昨年夏に曜日、時間を決め説明会を開催し多数の参加者を得たが、再度時期をみて説明会を開催する計画である。なお、普段でもO P A Cの検索方法についてわからないこと、疑問の点があれば係員に申し出ていただきたい。

(まつうら ただし：附属図書館事務部長)

お知らせ

本学公開講座ビデオテープ、オーディオテープの再視聴について

本学では昭和60年度から放送公開講座を実施しておりますが、去る11月よりビデオテープ（テレビ講座用）、オーディオテープ（ラジオ講座用）各13回分を図書館に備えつけて、受講者の方々に再視聴の機会を設けることになりました。

これは学生部のご協力によるもので、“もっと身近な場所で、いつでも気軽に再視聴ができるようにしてほしい”という受講者の要望で、図書館に備えることになったものです。

図書館ではこれらのテープがいつでも館内で再視聴できるようになっておりますので、貸出カウンターで申し込んで下さい。

なお、テープの館外貸出やダビングはできません。

研究用図書の受領は昼休み時間以外の時間帯にお願いします

昼休み時間中は交代制勤務のため、職員が一人で利用者の対応をしますので、貸出カウンターが混み合います。

研究用図書はできるだけ昼休み時間以外の時間に受領されるようお願いいたします。

また、夜間はできるだけ午後7時まで、また土曜日は午後2時半までに受領して下さいようにお願いいたします。

さらに、研究用図書を返却される場合は紙片に返却月日、氏名、冊数等をご記入の上、図書に添付して下さいようにお願いいたします。

なお、貸出は9時30分から行います。

書籍紹介 金田一春彦著「日本語新版」(上・下) 岩波新書

加藤 祐三

学生時代にこの旧版を読み、非常におもしろかったことを今でもよく記憶している。ほかの本のことはあらかた忘れてしまってもこの本のことだけはよく覚えている。よほど性にあっていたのだろう。

自分でも不思議なのだが、国語は大きらいな科目だったくせに、中学校のころから言語というものになぜか興味をもちつづけた。辞書を見るとカ行とサ行で始まる言葉が他の音より多いがなぜなのか。また、英語ではSで始まる単語が多くてKは少ない。これは日本語とだいぶ違うがなぜか、などと国語や英語の先生に質問をしていやがられた。その後何人かの先生に類似の質問をしたが、私にとって納得のいく説明は聞けなかった。

こういうことは国語や英語の先生にとって常識ではないらしいことがわかり、大学で勉強してみたいな、と思いはしたが、理科系の興味のほうが強くそのままになってしまった。こんな状況で大学に入ったことも、この本をおもしろく感じさせた一因だったのだろう。

二年前にこの新版が出たとき、なつかしさもあって早速読んだ。今度は上下二冊になり、読みでも増した。あらためて日本語を少し離れたところから見直すことができた。

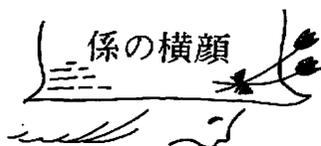
学生諸君が書いた文章を見るとよく誤字に出あう。出現頻度が高い字の文例はこうなる。()内が誤字である。「この講義(構議)を受(授)けて改(新)めて意外(以外)なことをしり関心(感心)をもった」。私も漢字に強くないが、でもこんなにひどくはない。たまりかねて授業で注意を与える。こんな誤字だらけのラブレターをもらったら程度がバレて百年の恋も一日にしてさめるぞ、と。するとさすがによくなる。

今回あらためて本書をめくり、日本語を考えた。日本語の特徴の一つは漢字の存在である。claustrophobia 閉所恐怖症、graminivorous 卓食性。こうした専門分野の言葉を日本語なら中学生でも漢字を見ただけでおおよそどんな内容なのか見当がつくが、英語ではある程度の古典語の知識をもつ人でないとわからないという。たまたまある業界誌で、照葉樹林の英語は一般のアメリカ人にはなんのことだか見当もつかないが日本人なら大体のことはわかる。これが日本語の特徴なんだ、という記事を読んだばかりだった。漢字を見れば感じがわかるというわけである。

漢字はたしかに便利だが、覚えるための負担は大きい。イタリア人は小学校に入って二、三年もすれば、意味はわからないものの新聞が音読できるという。日本とは大変な違いである。「その代わりいったん覚えてしまえば便利なのが漢字なので、イヤだとかきらいだとか言ってもどうせ日本語と離婚するわけにはいかないのだから、最低小学校の教科書に出てくる漢字ぐらいはキチンと覚えなさいよ。そうしないとワープロも使いこなせない」。これからは授業で誤字の注意を与えるときにはこうつけ加えようかな、と今思っているところである。

日本語を説明するために英語との比較を随所で行っている。これは理解を助けているだけでなく、和文英訳にも役立つ。毎日なげなく使っている日本語を客観的にながめ、長所短所を含めた性質を知ることは意味のあることである。本書はそれに適したすぐれた著作である。

(かとう ゆうぞう：理学部教授・岩石学)



参考調査係

参考調査係は、図書館の機能である情報の収集、整理、保存、提供のうち、最先端部分の情報提供サービスを受け持つ係です。何らかの情報（資料）を求めて図書館に来られる利用者に対して、山のような情報（資料）の中から、その要求に最適のものを探し、提供します。さらに、当館にない資料については、他の図書館から借用したり、雑誌論文の場合は、コピーを国内及び海外からも取り寄せて提供しています。

また、文献検索（ある主題の文献を、各種の索引誌や抄録誌等の二次資料を使ったり、データベース検索等で調査して提供するサービス）、文献所在調査（探し出した文献がどこから入手できるか、所在情報を提供するサービス）、事項調査（資料の照合・確認、研究者、研究機関等についての情報を提供するサービス）、利用指導（資料の探し方や使い方、図書館の利用方法の指導）など、利用者の調査・研究に直接的な援助を行っています。

これらの質問や調査依頼は3階カウンターで受け付けていますが、電話、FAX、文書による問い合わせにも応じています。また、社会に開かれた図書館として、市民の方々からの調査依頼にもお応えしています。（参考調査係 ☎098-895-2221 内線2143,2145 FAX:098-895-2651）

★新着雑誌及びバックナンバー

学術雑誌や一般教養雑誌は、受入係から参考調査係に届きます。当係ではコンテンツ・シート・サービスのためのコピーを終えると、直ちに新着雑誌架に配架（和洋毎の分類順）し、1年後には製本して書庫の3階と1階に配架します。

書庫内の資料配置については、各階入口の表示で確認してください。書庫から取りだした雑誌は、利用後各自で元の場所に戻していただいています。書架上の資料は左上から右下のほうへ年代順に並べてあります。書庫は、現在平日は17時まで（土曜日は12時15分まで）入庫できますが、近いうちに開館時間内は自由に利用できるよう、改善する予定です。当館の所蔵雑誌については、3階カウンター近辺に備えてある「所蔵目録」で、雑誌名と分類（主題）の両方で調べることができます。現在の雑誌受入種類数は、和雑誌が1,248種類、洋雑誌が1,227種類、合計2,475種類です。

★文献複写サービス

図書館資料については、調査研究の目的に利用する場合に限りコピーすることができます。著作権法の規定の関係で、ほとんどの図書はその全体をコピーすることが禁じられています。雑誌論文についてもコピーの部数は、1部だけとしています。料金は以下のとおりです。

内 訳	学内者	学外者	利用時間
校費（カード）	10円	—	開館中は随時コピーできます。
〃（申込）	13円	—	平日：9：00～16：45
私 費	20円	35円	土曜：9：00～12：15

*12：00～13：00は昼休みです

★相互貸借

利用者が必要とする文献（資料）が入手できるように図書館間で協定し、相互協力活動のもとに図書の新刊やコピーの提供を行っています。本学にない図書は、国内の大学図書館や国立国会図書館等から借用して提供しています。また、雑誌論文については、国内にない場合は英国のBLDS C (British Library Document Supply Centre) 等の情報機関に依頼して、提供しています。この場合の利用は校費で支弁できる方に限ります。

図書の借用やコピーは、国内の場合申込後10日間以上を要します。外国の場合は約1ヵ月です。コピーの受領は複写室（3階カウンター隣）です。

★コンテンツ・シート・サービス

研究に欠かせない最新の情報である学術雑誌の最新号が到着次第、その目次をコピーし、前もって登録している研究者に対して送付するサービスです。

①学科（または専攻）単位で申し込む場合は、雑誌数に制限はありませんが、コピー部数は1部としています。

②個人で申し込む場合は、10誌だけに限られています。

また、農学関係の外国雑誌センター館である鹿児島大学附属図書館所蔵雑誌のコンテンツ・シート・サービスも実施しています。料金は1枚75円で、その内訳はコピー料金35円、ファクシミリ料金40円となっています。

申し込み、問い合わせはいずれも3階カウンターまでお願いします。

★国際関係資料

3階雑誌閲覧室に国際関係資料コーナーがあります。ここにはUN（国連）、EC（ヨーロッパ共同体）、OECD（経済協力開発機構）、UNESCO、アジア関係の資料を配架してあります。

当館は1958（昭和33）年10月にUNESCO寄託図書館となり、1975（昭和50）年にはOECDの協力館となって、ブランクセットオーダーで資料を購入しています。また、1985（昭和60）年11月にEC資料センターに指定され、1986（昭和61）年4月には国連寄託図書館となりました。

将来ますます進むであろう国際化の時代に向けて、国際資料の充実に努力し、当館コレクションの特色の一つとしています。

★図書館報「びぶりお」

図書館の広報誌で、年4回（3月、6月、9月、12月）発行しています。16～20ページの小冊子ですが、利用者の役に立つ情報の提供を目指して、毎号編集に取り組んでいます。

内容は図書館からのお知らせや、新刊書、教官寄贈図書、特殊コレクションの紹介、図書館界のニュース等が掲載されますので、図書館を理解するための情報誌としてご愛読ください。発行後は2階玄関正面の掲示板付近に置きますので、自由にお取りください。

沖縄関係資料新着案内

0類 総記

1. 琉球王国評定所文書 第一、二、三、五巻
浦添市教育委員会 1989.3

1類 哲学

2. のろ調査資料：1960～1966年調査（中山盛茂・富村真演・宮城栄昌） 那覇 ポーダーインク 1990.10
3. 沖縄の風水（窪徳忠編） 平河出版 1990.9

2類 歴史

4. 西表島自然誌：幻のオオヤマネコを求めて（安間繁樹） 昌文社 1990.8
5. 系図は生きている：尚思紹王統門中の世系図と家譜（當真莊平） 浦添 大永印刷 1990.9
6. 考古学からみた琉球史 上：古琉球世界の形成（安里進） ひるぎ社 1990.9
7. 南西日本の歴史と民俗（小野重朗先生傘寿記念論文集刊行委員会編集） 第一書房 1990.9
8. 沖縄の挑戦（大田昌秀） 恒文社 1990.9
9. 憶う、時の流れに（大田政作） 北島印刷 1989.6
10. 潮騒に燃えて：渡久地政信自伝 沖縄サザンプレス 1990.8
11. 主席判事物語（平田清祐） 那覇 文進印刷 1990.10
12. 竹富島の歴史と民俗（亀井秀一） 角川書店 1990.5
13. わったあ兼久（知念良折雄） 那覇 文進印刷 1990.3

14. With Perry to Japan : a memoir by William Hein, translated, with an introduction and annotations, by Frederic Trautmann. Honolulu, University of Hawaii Press, 1990.

15. 与勝の歴史散歩：ふなやれ・平安座（親川光繁） 豊見城 第一印刷 1990.2

3類 社会科学

16. 心霊治療で病気はここまで治る（宮城功光） 那覇 月刊沖縄社 1990.8
17. えほんだあーいすき：保育所の窓から（ひらた えみこ） 沖縄 わらべ書房 1988.8 （わらべブックレットNo 4）
18. 目でみる沖縄の民俗とそのルーツ（窪徳忠） 浦添 沖縄出版 1990.9
19. 沖縄県地域開発プロジェクト・実地事業総覧：平成元年度版全面改定版（平成元年4月～平成2年3月国県市町村&民間大型事業のすべて）（長浜博文編集） 沖縄ビジネス情報企画社 1990.7
20. 沖縄の祖神アマミク（外間守善文、桑原重美写真） 築地書館 1990.10
21. 沖縄の祭祀と信仰（平敷令治） 第一書房 1990.10
22. 社長さん：本土と沖縄—ここがこう違う（大城光雄） 那覇 光データシステム 1990.2
23. 新聞にみるハワイの沖縄人90年—戦前編—（比嘉武信） 那覇 若夏社 1990.10
24. 思春期を迎えた日本の政治：金権選挙区・奄美群島にみる中選挙区制度の終焉（保岡興治監修） 東都書房 1990.9

25. 太陽の天使たち：オジサンコーチと浦添(陸上)クラブの子供たち(武富良祐) 南風原 うるま印刷 1990.9
26. 座喜味の民話(読谷村教育委員会歴史民俗資料館編) 那覇 文進印刷 1990.3 (読谷村民話資料集10)

4類 自然科学

27. 沖縄海中生物図鑑第11巻(岩瀬文人他)財団法人海中公園センター監修 サザンプレス 1990.8
28. 沖縄の自然—地形と地質(氏家宏編集) 那覇 ひるぎ社 1990.8
29. 親子で見る沖縄の身近な植物図鑑：この花な—んだ(いじゅの会) 沖縄出版 1990.8
30. 島しょ水環境の展望：沖縄・ハワイのアプローチ(島しょ水環境研究グループ編) 那覇 ひるぎ社 1990.10 (地域科学叢書8)

6類 産業

31. 沖縄のリゾート業界入門(渡久地明) 那覇 沖縄観光速報社 1990.8
32. 八重山開拓物語：人魚の歌がきこえる島へ(山口君代) 沖縄 わらべ書房 1990.8

7類 芸術

33. 宮城与徳遺作画集(沖縄タイムス社編) 1990.10
34. 日本民謡大観(沖縄・奄美)：宮古諸島編(日本放送協会編) 日本放送出版協会 1990.8
35. 沖縄の遊行芸：チョンダラーとニンブチャー(池宮正治) 那覇 ひるぎ社
36. 沖縄を超えるもの(萩弘義・宮城弘岩)

ボーダーインク 1990.9

37. 老人と海：与那国島(本橋成一写真録 文=坂田明) 朝日新聞社 1990.8
38. 潮香る南国のやきもの(井上靖・吉田光邦監修、第二アートセンター編集) ぎょうせい 1990.1 (やきもの大百科—第3巻九州・沖縄編)

9類 文学

39. おもひがなし：金城芳子歌日記 那覇 ニライ社 1990.8
40. あしみね・えいいち詩集：美意識のいそぎんちやく 那覇 脈 1990.7 (沖縄現代詩文庫5)
41. 滂沱：知念榮喜詩集 神戸 図書出版まろうど 1990.
42. 歌集 穂波：女人短歌叢書第533篇(新里スエ) 短歌新聞社 1990.6
43. 幸喜弧洋詩集 那覇 脈 1990.6 (沖縄現代詩文庫6)
44. 沖縄文学全集第9巻小説4(編集委員会) 図書刊行会 1990.9
45. 親と子のための沖縄古典文学(平山良明) 沖縄 むぎ社 1990.10
46. 鈴富：平成元年沖縄年刊合同歌集(沖縄県歌話会) 那覇 沖縄歌話会編集委員会 1989.12
47. 琉歌：その表記と訓みについて(喜友名朝亀) 北谷印刷 1990.4 (声楽譜付、野村流工四所収の琉歌を中心として)
48. 島尾敏雄(島尾ミホ他) 宮本企画 1989.4 (かたりべ叢書25)
49. 遊魚の詩(中島遊魚) 那覇 ひるぎ社 1990.10

アーキビストの養成 ～平成2年度「史料管理学研修会」に参加して～

松原 敏夫

この研修会は、毎年、国文学研究資料館にある史料館が主催して行っているもので、長期研修課程と短期研修課程がある。今回私が参加させて貰ったのは、短期研修課程である。この方は、11月5日から16日の日程で岡山市青少年会館で行われた。

カリキュラムを紹介すると、1日目＝史料管理学序論、史料の保存科学 2日目＝近世史料論Ⅰ（総論・幕藩史料）、近世史料論Ⅱ（町方・村方史料） 3日目＝史料所在調査法、地域社会と文書館、岡山大学附属図書館における史料管理 4日目＝近現代史料論、史料の修復・補修 5日目＝近世史料の整理と検索手段の作成、近現代史料の整理と検索手段の作成 6日目＝史料の装備と配架、史料の利用と情報サービス、総括討論 7日目＝休日 8日目～12日目＝レポート作成という内容であった。

ここでいう「史料」とは、いわゆる図書館の資料のなかでの記録類に属する原資料のことである。つまり、図書、雑誌資料といったものではなく、公的・私的な記録文書資料である。

こういう歴史的な史料を収集し、保存し、利用させているところを文書館という。そして、そこに従事する専門家をアーキビストとっている。外国ではこのアーキビストの存在は古くから認められているが、日本ではまだそれ程知られていない。1987年に「文書館法」が出来て、アーキビストを置かなくてはならないということになり、ようやくにしてアーキビストの存在が法的に必要視されてきた状況ができてはいるが、しかし、いまだなおアーキビストへの認識はもとより、文書館そのものへの認識は、まだまだ低いといわれている。

この研修会の狙いは、つまりはアーキビストの養成ということである。カリキュラムの内容もその基礎的な知識から実際に考慮したものとなっている。

史料とは、文書館学とはいかなるものか、所在を突き止める方法は、その保存方法は、整理方法は、近世史料とは、現代史料とは、利用のための検索方法は、文書館の現状は……etc、といった内容を史料館の講師や、実際に文書館に勤務している方が講義し、岡山大学附属図書館にある池田家文書の管理の実際と見学、国宝修理所の技術職人による、実際に虫食いされた史料の修理と実習があったが、とくに、この虫食い史料の修理の実習は、和紙の性質を考慮しながら作業するもので、めったに体験できない貴重な体験であった。また、岡山大学の池田家文書の量の凄さには驚かされた。今年の8月から、ある写真企業に委託し、3ヶ年計画でマイクロフィルム化を進めているという。約6万点、200万コマになるという。

近現代にまたがる記録史料を収集、保存して地域の住民に開放する施設である文書館は、全国的には昭和34年の山口県文書館を初めとして、まだ20数県しか設立されていない。沖縄県内で、ひところ、琉球政府時代の公文書資料が廃棄処分されようとしたが、関係者の保存運動で県立図書館に移管され、難を免れた。これを契機に文書館設立の動きが起こったが、いまはどうなっているだろう。こういう政府関係の行政文書は、今後、たとえば旧アメリカ民政府や外務省等の公文書の公開がどんどんふえていくであろうから、ひとつにまとめて管理する文書館の設置が、やはり必要ではないだろうか。数量が膨大なだけに、図書、雑誌を中心とした図書館では無理があるような気がする。

(まつばら としお：情報サービス課学術情報係長)

図書館事情

◎附属図書館長の交替

安富祖忠信館長（工学部教授）の任期満了に伴い、後任に法文学部の比嘉長徳教授が平成2年11月1日付で発令され、第17代の附属図書館長に就任した。



[比嘉長徳図書館長略歴]

1972（昭和47）年 University of Georgia 大学院博士課程
Department of Language Educationコースワーク修了
1958（昭和33）年 MS in English Education,
Kansas State Teachers' College
1964（昭和39）年 本学助教授
1973（昭和48）年 本学教授
専門分野：アメリカ文学

[会 議]

- ・平成2年6月13日（水） 第185回図書館運営委員会
議題1 図書館の増築について
- ・平成2年10月25日（木） 第186回図書館運営委員会
議題1 視聴覚機器専門委員会について
2 沖縄研究資料調査収集専門委員会について
- ・平成2年12月11日（火） 第187回図書館運営委員会
議題1 当面の諸問題について
2 平成3年度大型コレクションについて

[講演会]

- ・学術情報システム特別講演会
日時：平成2年9月26日（水）
場所：大学会館3階ホール
講師：学術情報センター助教授 橋爪宏達氏
事業部システム管理課長 大埜浩一氏
演題：「学術情報流通の現状と進展」
- ・沖縄県大学図書館協議会研修講演会
日時：平成2年9月27日（木）
場所：附属図書館会議室
講師：学術情報センター事業部システム管理課長 大埜浩一氏
演題：「学術情報センターと大学図書館」

[人事異動]

平成2年10月1日付（配置換）

情報管理課受入係	山里道子 (前情報サービス課参考調査係)
〃 整理係	本永順子 (前情報管理課受入係)
〃分館整理係	上原恵子 (前 〃 整理係)
情報サービス課参考調査係	伊佐眞一 (前 〃分館整理係)

医 学 部 分 館 だ よ り

◎本学の当番で九州地区医学図書館協議会総会開催

日 時：平成 2 年11月15日(木)

場 所：ホテルエッカ

参加館：国公私15大学、県内 2 公立病院図書室

ここで協議された主な議題は、以下のとおりである。

- ①研究者が望む医学図書館のあり方について
- ②研究者が望む医学図書館員の資質について
- ③CD-ROM (特に医学関係二次文献を中心として) 利用に伴う現状と問題点について
- ④第63回 (平成 4 年) 日本医学図書館協会総会への協力依頼について
- ⑤第18回医学図書館員セミナー開催について
- ⑥平成 3 年度日本薬学図書館協議会全国研究集会を第一薬科大学図書館が担当することについて
- ⑦次期当番館について

◎CD-ROMチェンジャーの設置について

昨年11月末にMEDLINE用のCD-ROMチェンジャーを設置しました。これまでは1枚ずつディスクを入れていましたが、今後は6枚同時に検索することが可能になり、利用が簡単になりました。



電子メールサービス (NACISIS-MAIL) のデモンストレーションについて (予告)

本号 5 ページでもご紹介したように、平成 3 年 1 月から学術情報ネットワークが沖縄県まで延長敷設され、本学がノード校になります。

図書館ではこれを機会に、学術情報センターが提供しているサービスの一つである、電子メール (NACISIS-MAIL) のデモンストレーションを予定しています。

この電子メールサービスには、国内用 (無料) と国際用 (有料：20円/1KB) とがありますが、今回実演するのは国内用です。

電子メールは、各研究室などに設置されたオンライン端末機から、学術情報ネットワークのほか NTT の DDX パケット交換網 (第 1 種、第 2 種) 及び公衆電話回線を通じて、同センターのメールボックス (郵便箱) を介して情報の交換を行える大変便利なシステムで、このほか電子掲示板 (BBS) 等も利用できます。

詳細については、追ってご案内する予定です。

実施予定日：平成 3 年 2 月上旬

場 所：附属図書館 (本館) (担当：情報サービス課学術情報係 内線2146)



◎学術情報センター（NACSIS）の新しいデータベースについて

1) アメリカン・センター図書館総合目録データベース（呼び出しコマンド：ACCAT）

国内にあるアメリカン・センター図書館6館（札幌、東京、名古屋、京都、大阪、福岡）が所蔵する図書に関するデータを収録しており、内容は以下のとおり。

- ・経済：アメリカ国内経済、国際経済関係、貿易
- ・国際関係：アメリカ外交・防衛政策、日米関係
- ・現代アメリカ社会：アメリカ政治、社会、文化
- ・21世紀の世界：エネルギー、資源、環境、宇宙、食糧、都市問題
- ・文学・芸術：文学、美術、建築、音楽、舞台芸術

なお、検索した図書を所蔵館から借用することもできます。

2) 海外研究プロジェクトデータベース（呼び出しコマンド：EXRP）

従来、研究プロジェクト情報データベースと仮称していたもの。下記の参加8か国の参加機関が、それぞれの国内で行った助成に基づく研究プロジェクトのカタログデータを収録している。ただし、当面は*印の機関のみ対象となっている。

- ・日本：*学術情報センター、日本科学技術情報センター（JICST）
- ・カナダ：National Research Council（国立研究協議会）
- ・ドイツ：*Deutsche Forschungsgemeinschaft（ドイツ研究協会）
- ・フランス：Centre National de la Recherche Scientifique（国立科学研究センター）
- ・英国：*Science and Engineering Research Council（科学工学研究協議会）
- ・イタリア：*Conciglio Nazionale delle Ricerche（国立研究協議会）
- ・スウェーデン：Styrelsen for Teknisk Utveckling（国立技術開発委員会）
- ・米国：*National Science Foundation（国立科学財団）

これらのデータベースの検索方法、料金等については、附属図書館情報サービス課学術情報係までお問い合わせください。

◎平成2年度大型コレクション収集計画について

今年度の全国の大規模コレクションについては、下記の資料に対して予算が配分されることになった。なお、金額は外国、国内合わせて18,867万円である。

（外国図書）

- ・北海道大学：ゲルマン法史及び中世法史関連コレクション
- ・福島大学：帝政ロシア及び現代ソビエト社会・経済研究
- ・東京医科歯科大学：人間の神秘と探究の図譜

- ・横浜国立大学 : 新大陸関係地形図集
- ・新潟大学 : アメリカ文化シリーズ
- ・長岡技術科学大学: レオナルド・ダ・ヴィンチ コピイチェ アトランテコ手稿
- ・山梨大学 : スピノザの作品と影響 多領域に亘る稀観書
- ・静岡大学 : 近現代ドイツ産業・経済統計資料集
- ・滋賀大学 : 米国文化研究基本文献集成
- ・京都大学 : 西アフリカの歴史と民族コレクション
- ・和歌山大学 : イギリス教育コレクション
- ・宮崎大学 : イギリス教育史コレクション
- ・鹿児島大学 : タイムズ版幕末期から明治初期日本関係記事
(国内図書)
- ・宮城教育大学 : 江戸期仙台版往来物コレクション
- ・金沢大学 : 本邦商議会議所資料
- ・信州大学 : 占領軍検閲雑誌目録解題等
- ・大阪大学 : 黒田重太郎文庫
- ・神戸大学 : 古辞書集成
- ・九州大学 : 近世木活字本コレクション

OPAC (オンライン図書目録検索システム) の利用状況について

	6月	7月	8月	9月	10月	11月	計
館内OPAC専用端末	874	1,147	484	755	892	726	4,878
研究室等端末	139	74	55	16	9	10	303
事務用端末	26	3	0	3	6	10	48
その他	18	12	4	10	6	1	51
計	1,057	1,236	543	784	913	747	5,280

*このサービスは平成2年6月から開始したものです。

*数字は、端末からOPACにアクセスした回数を表しています。

*館内OPAC専用端末とは、OPACを利用するために図書館に設置された端末で誰でも自由に利用できます。(本館5台、医学部分館2台)

琉球大学附属図書館報 “びぶりお” 第23巻 第4号 [通巻第89号]

平成3年1月21日 発行

発行 琉球大学附属図書館 〒903-01 沖縄県中頭郡西原町字千原1番地

電話 098 (895) 2221 内線 (2143) 編集 びぶりお編集委員会